

【第19期 台日連盟電子報——プロジェクト推進の歩み】

一冊の恋愛物語が、いかにして一つの部落をもう一度開いていったのか——『アリ
恋愛記憶』を共に編む

文／趙芳儀（国立屏東大学 国家科学及技术委員会 人文イノベーション・社会実践プロジェクト ポストドクター研究員）

「恋愛」をめぐるこの記録活動は、もともと私たちの人文社会系プロジェクトの計画に含まれていたものではなかった。

国立屏東大学の人文イノベーション・社会実践プロジェクトが長治百合永久屋園區に入ってから、アリ（Adiri）部落はチームが長期的に関わってきたフィールドの一つである。初期には、アリ文化健康ステーションで「Sasadra古道から始めよう」という文化講座を実施し、古道、地名、山林に関する知識、そして移住の経路を手がかりに、アリ部落の暮らしの歴史をもう一度捉え直そうとしていた。

しかし、講座の方向を本当に変えたのは、あらかじめ設定していた研究課題ではなかった。古道のそばで交わされた、何気ないいくつかの会話だった。

山道を登るのは、いつもゆっくりだ。しばらく歩いては立ち止まって水を飲み、石のそばに座って休む。そんな合間に、最初に用意していた質問は少しずつ脇へ置かれていった。ある長老が道端の石を指さし、若い頃、誰かがそこで恋する相手を待っていたと笑いながら話し始める。すると、別の長老がそれを聞いて、後になって二度と歩きたくなかった道の話が続ける。誰かが冗談を言い、誰かが話を補い、そして誰かはしばらく黙った後、記憶の奥にしまわれていた名前をゆっくりと口にした。

それらの言葉は、正式なインタビューによって引き出されたものではない。足元の道をたどるように、一つ、また一つと浮かび上がってきたものだった。

私たちは当初、古道から部落を理解しようとしていた。ところが最後に気づいたのは、長老たちが長い時間をかけて語り合い、互いに話を補い合い、さらには競うように過去の出来事を語ろうとしたのは、若い頃にどのように異性と出会い、どのように恋をし、どのように別れ、そして両親や家族の決めた縁組によって、どのように結婚生活へ入っていったのかという話だった。

こうして、恋愛はアリへと続く、もう一つの道になった。

足元の古道から、部落の生活世界へ

アリ（Adiri）は、数百年の歴史を持つルカイ族の部落である。2009年のモーラコット台風災害の後、住民は故郷から平地にある長治百合永久屋園區へと移住した。この移住は、単に居

住地が変わったというだけではない。人々と土地、山林、そして日々の暮らしとの関係そのものを変える出来事でもあった。

かつては、多くの知識をわざわざ説明する必要はなかった。子どもたちは長老について古道を歩き、畑に入り、山へ採集に出かける中で、どこで休めばよいのか、どの季節に何をすべきなのかを自然に知っていった。そして、日々の暮らしを通して、家族関係や部落の規範も少しずつ理解していった。

しかし、平地へ移住した後、かつては実際の生活の中で実践できた知識が、その馴染み深い場を失っていった。いくつかの規範は今も長老たちによって繰り返し伝えられているが、若い世代にとっては、それがどこから来たものなのか、必ずしも分かるとは限らない。

恋愛と結婚は、まさにこうした違いを浮かび上がらせるものだった。

今日、恋愛はしばしば二人の選択として理解される。しかし、アリの長老たちの語りから見てきたのは、一つの関係が決して男女二人だけの問題ではなかったということである。誰が誰を追ってよいのか、家族が同意するのか、血縁や身分の上でふさわしい関係なのか、男性が農作業を手伝う意思を持っているのか、女性はどのように応えるべきなのか。その背後には、長い時間をかけて形成された倫理と秩序が存在していた。

長老たちは、単に「私は誰が好きだった」と語ることは少ない。むしろ、両親の決定、長女としての責任、兄弟姉妹の序列、貴族と平民という身分、異なる家族同士の関係、そして個人の感情がそうした条件の中でどのように守られ、先送りされ、あるいは手放されていったのかを語る。

だからこそ、恋愛は単なる青春時代の思い出ではない。それは、アリの人々が家族、責任、結婚をどのように捉えてきたのかを見せてくれる。そして、もともと抽象的だった社会規範を、具体的な人生経験の中へともう一度戻してくれるのである。

文化健康ステーションで、記憶が一つ、また一つとつながり始める

2024年7月18日から2025年9月25日まで、私たちは、それまでの古道および関連する文化講座を基盤として、「恋愛の記憶」を中心とした語りの場を20回以上にわたって実施した。

講座は、固定された質問票に沿って一問ずつインタビューする形式ではなかった。私たちが提示するのは、たとえば古道、若い頃の交友関係、結婚、別れ、結婚後の生活など、大まかな一つの方向だけである。そして、どこから語り始めるのかは、長老たち自身に委ねた。

多くの長老はルカイ語で語ることに慣れており、モーゼ牧師が中国語への通訳を担った。ほかの長老たちはそばで話を補い、ときには名前を思い出させ、ときには年代を訂正し、同じ出来事について異なる記憶がある場合には、互いに話し合うこともあった。

一人の物語が、別の人の記憶を呼び起こすことも少なくない。もともとは数分しか語られなかった出来事が、何度か講座を重ねるうちに、少しずつその全体像を取り戻していくこともあった。

チームが行ったのは、録音、逐語録の整理、出来事の前後関係の確認、そして口頭で語られた内容を一人称の物語へと書き直す作業である。一見すると、単なる文章編集のように見える。しかし実際には、私たちは何度も自分自身に言い聞かせなければならなかった。物語を面白くするために、長老が語っていない出来事を付け加えてはいけなかった。ある記憶が不完全だからといって、その因果関係をこちらで推測してはいけなかった。族語の翻訳にまだ不確かな部分がある場合も、それを無理に一つの結論へとまとめるのではなく、その不確かさを残すべきである。

私たちは当初、講座の記録を残すことだけを考えていた。ところが少しずつ積み重なった語りは、26人の長老たちの恋愛と結婚の物語となった。『Sangulrialringavane ki sua Adiri——ア
リ恋愛記憶』という一冊の本は、こうして一度一度の会話、録音、翻訳、そして書き直しの中から、少しずつ形を成していったのである。

物語が書き留められたとき、青春もまた、もう一度その姿を取り戻した

ある物語が語り始められると、教室いっぱいに笑い声が広がることがある。

「愛玉を山道いっぱいにこぼしたmumu」は、若い頃、現在の妻を追いかけた時のことを語った。女性の両親に自分の誠意を見てもらうため、彼は二人の長老とともに山へ愛玉を採りに行った。帰り道、一袋一袋の愛玉は、彼一人では背負えないほど重かった。そこで彼は、幼い頃に木材を山から引きずり下ろした方法を思い出し、袋ごと地面に置いて引きずっていった。ところが、袋はすぐに擦り切れて破れ、愛玉は山道に沿ってあちこちへ転がり落ちてしまった。最後には、女性の両親まで一緒になって、一粒ずつ拾い集めなければならなかった。この散々な経験こそが、長老たちに彼の真剣さを伝えることになり、何年も後に結婚生活を振り返った時にも、最も生き生きとした場面として残っていた。

「愛をラブレターに描いたmumu¹」もまた、ある女性を追いかけるために、大きな木材の束を背負ったことがある。一緒にいた男性の友人は体格がよかったにもかかわらず手伝ってくれず、彼は一人でどうにか木材を女性の家まで運んだ。歩いている間、両足は何度も震え、背中には木材の棘が刺さって血が流れていた。それでも本人は、そのことに気づいていなかった。あの時代の恋愛は、何気ない愛の言葉だけで成り立つものではなかった。女性の両親に、その人の体力、勤勉さ、そして最後までやり抜く気持ちを見てもらう必要があったのである。

一方で、静かに語られる物語もある。けれど、それを聞く私たちは、少しずつ言葉を失っていく。

「先に誰かを好きになってはいけなかったkayngu²」は、家族の長女として、13、14歳頃から家族の取り決めによって異性と知り合うようになった。会う時には二人きりになることは許されず、周囲にはいつも長老や友人がいた。たとえ心の中に好きな人がいたとしても、親密になりすぎているように見せてはいけなかった。なぜなら、長女の結婚は彼女自身だけの問

¹ 「mumu」はルカイ語で、祖父・母方の祖父を意味する。

² 「kayngu」はルカイ語で、祖母・母方の祖母を意味する。

題ではなく、下にいる弟や妹、そして両親が考える家族の将来にも関わるものだったからである。彼女はこう語った。女性として、特に長女として、両親の決定に従うしかなかった。たとえ好きな人がいても、それは心の中にしまっておくしかなかった、と。この言葉には、激しい告発はない。それでも私たちは、後になって「伝統」と呼ばれるようになった同じ婚姻の仕組みが、異なる立場に置かれた人々にとって、まったく異なる重みを持っていたことを知る。

「山越しの雨を越えてきたkayngu」は、ある収穫祭の時期に大雨が降り、道が非常に悪くなっていてもかかわらず、夫がバイクに弟を乗せ、一路アリまで会いに来てくれた日のことを覚えている。途中、バイクは激しく揺れ、転倒しそうになった。それでも彼は引き返そうとはしなかった。何年も経った今でも、彼女の心に最も強く残っているのは、あの雨と、どれほど道が遠くても、どれほど天気が悪くても、それでも会いに来てくれた一人の男性の姿だった。彼女は後に夫へこう伝えた。「あなたを愛しています。永遠に愛しています。そして、あなたの健康とすべての幸せを願っています。」

これらの物語の中で、愛は直接的な告白として現れることがほとんどない。それは一束の木材かもしれない。一袋の愛玉かもしれない。雨の中を会いに来た一つの山道かもしれない。あるいは、心の中に好きな人がいながら、両親の決定に従い、別の人との結婚生活へと入っていったことかもしれない。

ラブレターに描かれた犬が、数十年後によく答えを得た

「何年も経ってから初めて『愛している』と言ったkayngu」と「愛をラブレターに描いたmu mu」は、また別の形のロマンスを残している。二人とも、自分の感情を直接表現することがあまり得意ではなかった。若い頃、夫は自然が好きだった。そこで、二人で一緒に見た風景を手紙の中に描いた。ところが、その絵は簡単には見分けられないものだった。手紙を受け取った妻は、紙に描かれているのが犬なのか、それとも山羊なのか、ずっと分からなかった。それから数十年が経ち、二人は文化健康ステーションでこの話をもう一度することになった。そして、ついに謎が解けた。夫によれば、犬を描いたのであれば、自分は犬のように忠実だという意味。山羊であれば、ふらふらしていい加減だという意味だった。

つまり、長年理解できなかったあの絵もまた、一通のラブレターの一部だったのである。

「何年も経ってから初めて『愛している』と言ったkayngu」は、厳格な家庭で育った長女で、幼い頃から弟や妹の面倒を見ることを求められていた。一方、夫は比較的自由な家庭の出身であり、二人の育った環境は大きく異なっていた。結婚後も、子どもや孫、そして家族生活をめぐって、二人はさまざまなすり合わせを経験した。そして何年もの歳月を経て、彼女は初めて皆の前で夫にこう言った。「あなた、愛しているよ。」夫は笑いながら、それは今まで一度も聞いたことのない言葉だったと語った。一見すると、何気ない会話にすぎない。

しかし、このやり取りから私たちは理解することができる。長老たちは愛がなかったのではない。ただ、愛を表現する言葉と方法が、今日とは違っていたのである。ある思いは絵の中

に隠され、ある思いは労働や世話の中に込められ、そしてある言葉は、数十年にわたる結婚生活を歩んだ後に、ようやく口にされた。

恋愛の中には、アリの暮らしを支える一つの秩序があった

物語が積み重なるにつれ、私たちは何度も繰り返し登場する、いくつかの文化的な場面を少しずつ見分けられるようになった。

男性が女性を追う時、一人で女性の家へ行くことは通常なかった。兄弟、友人、あるいは長老が付き添い、女性の家を訪ねて歌を歌い、話をした。翌朝早くには、女性の家族とともに畑へ行って農作業を手伝ったり、女性と長老たちが農地から帰ってくる途中に迎えに行き、農作物や木材を背負う手伝いをしたりした。

男性が気を配らなければならなかったのは、女性の表情だけではない。むしろ重要だったのは、彼女の両親や家族がどのような態度を示しているかだった。なぜなら、最終的に結婚を決めるのは、若い男女ではなく、双方の長老たちであることが多かったからである。

窓の外でハーモニカや鼻笛を吹き、言葉にすることのできない思いを音楽に託す少年もいた。好きな女性のために花輪を編んで贈り、女性はスカーフを返礼することもあった。山へ入り、良質な九芎の木を切り出して女性の家まで背負い、労働によって誠意を示す者もいた。外へ働きに出る時や兵役に赴く時には、互いに山の上から手を振り、狼煙を上げた。煙が濃く立ち上るほど、心の中の別れを惜しむ気持ちが深いのだという。遠くからも煙が上があれば、それによって相手が自分を見送っていることを知ることができた。

女性の行動にも多くの規範があった。男性と二人きりになることはできず、服装は慎ましく整えなければならない。ふくらはぎや膝を見せることも、相手をまっすぐ見つめることも避けなければならない。たとえ心に好きな人がいたとしても、簡単に「あなたが好き」と口にすることは望ましくなかった。いくつかの物語では、愛情を公に伝えることができる本当の瞬間は、結婚前に、かつて自分を追ってくれたものの結ばれることのなかった相手へ別れを告げる時だった。

これらの記憶は、決してすべてが甘美なものではない。そこには同時に、家族としての責任、身分の序列、ジェンダー規範、信仰の違い、そして自分自身の意思と両親の決定との間で揺れ動く思いが含まれている。

だからこそ、『アリ恋愛記憶』は、誰が誰を追い、最後に誰と結婚したのかだけを語る物語集ではない。26人の長老たちの人生経験を通して見えてくるのは、恋愛が家族倫理、婚姻制度、社会的階層、宗教的信仰、兵役、出稼ぎ、そして移住の経験と、どのように絡み合っていたのかということである。

恋愛は入口であり、本の中に本当に残されたものは、一世代のアリの人々の暮らしそのものである。

26の物語から、12の文化的記憶を描き出す

長老たちの物語を完成させた後、私たちは26の物語の中から、繰り返し登場し、文化的な意味を持つ12の恋愛の記憶を整理した。そこには、訪問、農作業の手伝い、花輪とスカーフ、恋の薪、狼煙、石の隙間に託された想い、写真の交換、結婚前の輪舞、別れの涙、そして嫁入りなどが含まれている。そして、アリの若者たちに物語をもとに絵を描いてもらい、「2026年 アリ恋愛記憶カレンダー」を制作した。

私たちが願ったのは、物語が本の中に収められるだけではなく、族人たちの日常へと入っていくことだった。カレンダーを家に掛け、一枚一枚ページをめくるたびに、長老たちがかつて歩いた道をもう一度思い出す。若者たちは、文化を受け身で受け取ったのではない。物語を読み、そこに描かれた状況を理解し、何度も絵を描き直す過程そのものを通して、文化的記憶の翻訳に参加したのである。

この本とカレンダーは、2025年12月に開催された成果展「愛が訪れたとき」の開幕式で、来場した来賓にも贈呈された。会場には、若者たちが描いた12点の作品、族人から提供された古い写真、そして文化健康ステーションの長老たちによる創作作品も展示された。

開幕式当日、本当に賑やかだった場所は、舞台の上だけではなかった。

族人たちは古い写真の前に立ち、写真に写る人物を指差しながら互いに確認し合っていた。ある人が「これは自分の兄だ」と言えば、すぐに別の人が訂正する。誰が誰を追いかけていたのかを語る人もいれば、古い写真を見たことで、物語の中から抜け落ちていた名前を初めて思い出す人もいた。来賓たちも自分自身の恋愛の物語を語り、古謡を歌い終えた後もまだ物足りず、続けて恋愛の歌や「報戦功」を歌った。

もともと壁に掛けられていた写真と文字は、族人たちの会話の中で、もう一度声を持つようになったのである。

一つの恋愛物語を書くということは、フィールドワークにおける「距離」を考えることでもある

この活動がチームにもたらしたのは、成果だけではない。私たちは、何度も考え直さなければならぬ多くの問いにも向き合うことになった。

恋愛と結婚は私的な感情に関わるだけでなく、今も生きている家族、かつての恋人、そして家族同士の関係にも関わっている。長老たちが文化健康ステーションで話してくれたからといって、そのすべてが公開に適しているとは限らない。講座の中で交わされた一つの冗談も、本の中に置かれた瞬間、まったく異なる重みを持つことがある。

逐語録を整理する際、私たちは、どの内容がその場で交わされた単なる挿話であり、どの内容が長老自身が本当に残したい記憶なのかを判断しなければならなかった。どの名前を出してよいのか。どの細部については慎重に扱う必要があるのか。そして何よりも、書き直しの基準を「物語として面白いかどうか」にしてはいけない。資料が不足している時には、私たちはあえて物語に空白を残す。もっともらしいけれど、実際には起こっていない出来事を、長老たちに代わって補ってはいけないのである。

この経験を通して、私は大学が部落に入ることの意味を、もう一度考えるようになった。

もちろん、私たちは記録し、整理する。しかし、資料を完成させたら、そのまま離れてよいわけではない。逐語録をどのように書き直すのか。物語をどこに置くのか。本や写真をどのように使用するのか。その一つ一つを、部落へ戻して説明しなければならない。大学ができるのは、長老たちに代わって「何が文化なのか」を決めることではない。時間、人手、そして方法を提供し、もともと一人ひとりの記憶の中に散らばっていた経験が、整理され、保存され、そしてもう一度族人たちの暮らしの中へ戻っていくことを支えることなのである。

一冊の本が完成した後、物語は本当の意味で動き始める

『アリ恋愛記憶』は現在、国立屏東大学の人文社会系プロジェクトチームとアリ文化健康ステーションが共同で完成させた成果書籍であり、今後は正式な出版に向けて取り組んでいく予定である。私たちにとって、これはすでに封印された成果ではない。

本が完成した後も、長老たちは次々と、以前は語り切れなかった内容を補足してくれている。家族の中には、両親が若い頃にどのような経験をしていたのかを初めて知り、家族の過去の結婚や暮らしについて尋ね始めた人もいる。若者たちは、カレンダーの絵を描く過程で、なぜ昔の人々は好きな相手をまっすぐ見てはいけなかったのか、なぜ女性を追うためにはまずその家へ行って農作業を手伝わなければならなかったのか、なぜ別れの時に山の上で狼煙を上げたのかを理解しなければならなかった。

こうした問いによって、恋愛の記憶はもはや長老だけのものではなくなった。それは、異なる世代が一緒に語り合うことのできるテーマになったのである。

一年以上前、私たちはただ長老たちとSasadra古道について話してみようと思っていた。一年余りが経った今、古道は私たちを26人の長老たちの青春へと連れていき、そして一冊の『アリ恋愛記憶』を残してくれた。

この本に、劇的で波乱に満ちた恋愛は出てこない。そこに記録されているのは、両足が震えるほど重かった一束の木材、山道にこぼれ落ちた一袋の愛玉、どれほどの雨でも会いに行くことを諦めなかった一人の男性、そして数十年後になってようやく答えが明らかになった、犬なのか山羊なのか分からなかった一枚の絵である。

一見すると小さな出来事に過ぎないこうした記憶から、私たちは、アリの人々がどのように愛し合ってきたのかを読むことができる。そして同時に、どのように家族を築き、責任を引き受け、家族の規範と個人の感情との間を歩みながら、それぞれの人生を生きてきたのかを知ることができる。

『アリ恋愛記憶』に残されたのは、26の恋愛だけではない。それは、26人の長老たちが、自分たちの青春をもう一度、次の世代へ語り聞かせることを選んだ、その人生経験そのものである。大学がそこに関わったのも、部落に代わって物語を書くためではない。これらの

物語が語られ、整理され、そしてもう一度部落へ戻っていく、その過程に寄り添うためだったのである。



写真1：

長老たちは、自分たちの恋愛の物語を語り始めると、次から次へと話が出てきて止まらない！



写真2～5：

4枚とも、2025年12月14日に開催された「アリ：愛が訪れたとき」開幕式の様子。左上は、

アリの長老たちが古謡を歌い終えた後もまだ歌い足りず、「報戦功」を歌い始めた場面。右上はアリの伝統的指導者夫妻。左下はアリの長老・柯清雄夫妻。二組の夫婦は、ステージ上で挨拶をする際にも、それぞれ恋愛の歌を歌い、自分たちの恋愛の物語を語った。右下は、アリの若い女性杜卉穎さん。両親から受け継いだルカイ語と多納語を組み合わせ、恋愛の歌を歌った。



写真6：

会場設営をしている段階から、すでに族人たちが古い写真の展示コーナーへ集まり、「写真を見ながら物語を語る」姿が見られた。



写真7：

「アリ：愛が訪れたとき」開幕式の儀式終了後、アリの長老が国科会人文社会系プロジェクトの謝若蘭先生とメンバーたちに、熱意と興奮を込めて展示や地域の物語を案内している様子。